



2019年11月

11月に入り、だいぶ季節が進み肌寒い日も続いてきましたね。朝晩と昼の気温差が激しい時期でもありますから、風邪に気をつけたいですね。

今回私をご紹介したい本は、『ハリネズミの願い』トーン・テレヘン著 長山さき訳 新潮社 2016です。このお話は、なにごとにもネガティブに考えてしまうハリネズミが主人公です。さまざまな動物を家に招待したいと思ひ手紙を書きます。しかし、ネガティブに考えるハリネズミですから、最終的には手紙を出すのをやめようと思ってしまうのです。

ちなみに、カワカマスとコイ、モグラとミミズ、カタツムリとカメ、クマ、ゾウ、キリン、チョウ、アリ、クジラ、リス、ネズミなど数十匹の動物が色んな章で登場します。

ハリネズミは自分にあるハリについて、コンプレックスを感じているのです。他の動物と仲良くしたいと思っけていても、自分のハリを怖がるのではないかと、おもてなしはこれでよいのかと。このお話を読んでいると、ハリネズミを応援したくなるし、想像する話がネガティブに展開してしまうのはいつまで続くのだろうか、最終章ではどんな終わり方をするのだろうかと期待しながら読むことができます。終盤では、冬のはじめのある日、予期せぬお客の訪問によって時間が止まればいいとさえ思えるようになるのです。訪問客がずっといればいいのにと。訪問客をいやと思わなくなるのです。そして、自分のハリは支えであり、頼みの綱 と思うのです。読み終わるとほっこりできます。

私にとって印象に残った言葉があります。それは、コフキコガネが家に来た時のことをハリネズミが想像した時、“孤独であっても、もしかしたら、居心地のよいことでありうるかもしれない”とハリネズミが思うのです。たしかに、友だちは多い方が楽しくていいイメージがありますが、時として、孤独であった方がラクと捉えられるのかもしれない。見方の違いによって捉え方も変えられるのだと改めて思えました。これは、コンプレックスについても言えると思います。周りの人からしたら気にしないようなことも、本人にとっては、深刻に捉えて悩んでいるとします。でも、違う側面から考えてみると、コンプレックスに思っていたことが意外にも良かったと思えられるようになるのではないかと。実際は、受け入れるまでに時間を費やす必要があるのでは簡単ではないと思いますが…。ありのままを受け入れることができる器の大きい人になりたいものです。

